

藤崎八幡宮跡出土遺物の研究 —藤崎台県営野球場とその周辺の遺構の変遷—

美濃口紀子

1 はじめに —特別史跡熊本城跡と藤崎八幡宮跡—

熊本博物館が立地する三の丸地区は「特別史跡熊本城跡」の範囲内に含まれている（平成17年3月追加指定：図1）。当館は現在、リニューアルに向けて準備を進めており、「特別史跡熊本城跡」（図2）内に立地する博物館として、敷地内での確認調査の実施（調査主体は熊本市文化振興課・熊本城調査研究センター）、確認調査成果の一般公開（「特別史跡熊本城跡」展開催）など、遺構の変遷についてあらためてまとめた。また、こうした成果を踏まえて現状変更許可申請も行った。

一方、博物館の南側に隣接する「藤崎台県営野球場」は現在、特別史跡外であり、埋蔵文化財包蔵地「熊本城跡遺跡群」という取扱である。しかしこの場所はまさしく「藤崎八幡宮跡」であり、古代～近代にかけての重要な遺跡であることに変わりはない（図3・4）。昭和35年（1960：熊本国体開催時）の野球場建設に伴い、その前年から熊本県教委によって発掘調査が行われ（註1）、その出土遺物は現在まで当館に寄託されているが、ここ数年で再整理を進めたという経緯もある。

また当館のリニューアル後の常設展示では、設計変更により新たに登場した吹き抜け空間を利用して「分野融合展示」（自然・人文）として藤崎台のクスノキ群（国指定天然記念物）及び藤崎八幡宮跡を取り上げ、出土遺物などの実物資料も展示する予定である。

本稿では藤崎八幡宮跡から出土した遺物を紹介し、併せて周辺の歴史の変遷についても知見を加える。調査から半世紀以上が経った今、あらためて藤崎八幡宮跡の出土遺物の内容や遺構の変遷を再考してみたい。



図1 三の丸地区航空写真（H17年の追加指定範囲）

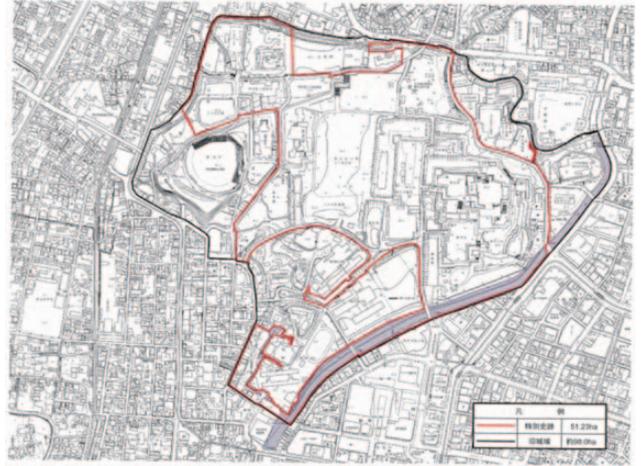


図2 「特別史跡 熊本城跡」の範囲（赤線）（註2）
博物館は特別史跡内、野球場は特別史跡外。

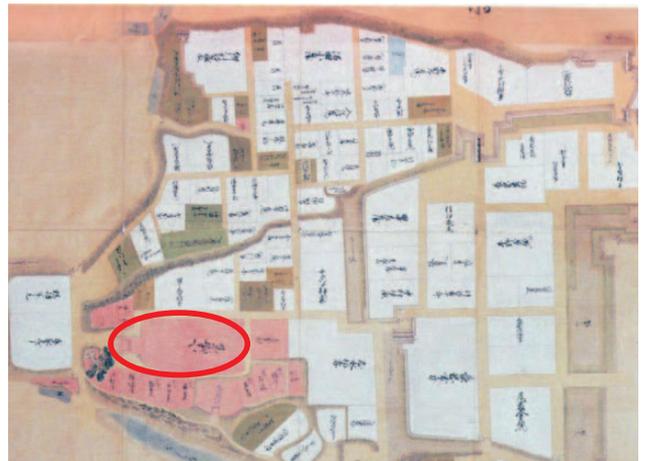


図3 ニノ丸之絵図（註3）明暦年前後（1650年前後）
熊本県立図書館蔵
八幡宮の西に段山、東に神護寺、南に六所宮。



図4 ニノ丸之絵図（註4）明暦年前後（1650年前後）
絵図積文・トレース版 熊本市歴史文書資料室

2 藤崎台の位置と環境

藤崎台の現在の住所は熊本市中央区宮内である。藤崎台は熊本城の西方約500m、標高25.27m、総面積21000㎡以上に及ぶ台地である。

熊本城築城前の旧地形を知る資料としては、当館所蔵の「茶臼山ト隈本之図」(昭和時代写し：図5)がある。築城前の地形が独立丘陵状に描かれ、「クワンノン堂」など築城前の土地利用状況を示している。原本が描かれた時期は不明だが、茶臼山の旧地形は、現在の本丸付近を最高所として東(千葉城方面)へは急に、西(藤崎台方面)へは緩やかに下がる地形であることがわかる。また、藤崎台付近には「八マン宮」の文字とともに、藤崎八幡宮が描かれている(図6)。

ところで藤崎台は元来、茶臼山の丘陵が西北方にのびた支丘の先端部に近く、西南戦争の頃にはさらに西方の段山の台地につながる場所で、与倉知実が戦死するなど大変な激戦地となった場所である。この段山を切り通して鉄道を通したのが明治24年(1891)、市電(上熊本-辛島町間)が通る道路を切り通したのが昭和3年(1928)である(図7)。それでも第二次大戦後までは、2つの線路の間に切り残された山の残骸が残っていたという(註5)。しかし昭和30年代に入ると、それらも次第に撤去されて済生会病院が建設された(図25)。さらに九州新幹線工事やこれに伴う在来線の高架化、道路の付替など、近年の開発工事により一帯の地形・景観は大きく改変された(図8)。現在段山自体は消滅し、一部の旧道や地名等に名残を残すのみである。

さて現在の藤崎台は、北・西・南の三方は断崖をなし、東方及び東北方は、護国神社及び古京町を経て、熊本城二の丸跡につながっている。おそらくかつての藤崎台は、もっと起伏の多い複雑な地形を呈していたと思われるが、やはりこの付近も長い年月の間に変形加工されて、今では広大な平坦部をなしている。

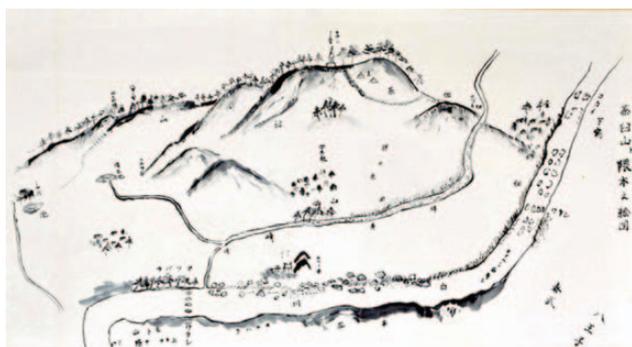


図5 茶臼山ト隈本之図(全体) 熊本博物館所蔵



図6 同上(藤崎宮部分拡大) 熊本博物館所蔵



図7 段山電停付近/段山は消滅(平成27年4月)



図8 藤崎台童園より市電を見下ろす(平成27年4月)

3 藤崎八幡宮の歴史と変遷

藤崎八幡宮は現在、熊本市中央区井川淵町に鎮座している(図9)が、元々は藤崎台に立地していた。

藤崎八幡宮の歴史(特に社殿の改築など遺構の変遷)については表1に詳しく記したが、祭神・由緒等については文献に記載がある(註6)。「熊本市内で唯一の旧国弊社であり、熊本市域の総鎮守として崇拝されている。祭神は一の宮が応神天皇、二の宮が住吉大神、三の宮が神功皇后である。もともと藤崎宮は山

城国男山の石清水八幡宮の分霊で、その勧請は朱雀天皇の承平5年(935)―一説には同3年―と伝えられている。そのころ、東国の平将門と西国の藤原純友が呼応して叛乱を起こしたため、朝廷では各地に武神を勧請して鎮定を祈った。その一つがこの藤崎宮で、今日の熊本城地となっている茶臼山の西隅に社地を定めた。そのとき随従の勅使が藤の鞭を地上にさしたところ、やがて根づいて見事な花を咲かせるに至ったので、社名を藤崎宮と称えるようになったという。その社地は現在の城内県営野球場のあるところで、今でもそこを藤崎台と呼び、七本の大楠が繁茂している。鎮座以来何度も社殿の改築が行われてきたが、鹿子木寂心が再興の功をなしとげ、その後天文11年(1542)に後奈良天皇より勅額を賜った。その文字に八幡と記されていたため、以来藤崎八幡宮ととくに幡の文字を用いている(図10)。加藤清正が武運長久を祈願して大陸に向かい、神助によって無事凱旋することができたので、報恩のために神幸式(放生会)を再興し、自身も多くの兵を率いて神輿に従った。それ以来神幸式には随兵として百騎の武者が従うことになったという。細川氏の代にも尊信厚かったが、西南の役での激戦地となったため、社殿楼閣悉く兵火にかかって焼滅した。その後神社は社地を井川淵に移し今日に至っている。



図9 藤崎八幡宮の鳥居と参道(平成27年4月)



図10 鳥居の扁額「八幡藤崎宮」(平成27年4月)

4 藤崎八幡宮跡周辺の建物配置(歴史資料より)

当館所蔵の『肥藩図巻』の中には「藤崎宮」が含まれている(図11)。「肥藩図巻」は、江戸後期に肥後藩主の供廻り(警備担当者)が記録として残したものとされる。藤崎宮の他にも藩内の各所(熊本城本丸・本妙寺・妙解寺・神護寺・六所宮・時習館など)におけるそれぞれの「警固記録」が描かれている。

「藤崎宮」部分を見ると、まず西側から高い石段2ヶ所を登って石鳥居をくぐる。敷石の参道を進むと正面に楼門・廻廊が見え、その奥に拝殿・本殿が続く。本殿の周囲には摂社・末社がある。境内の大木はその後国の天然記念物に指定されたクスノキ群であろう。

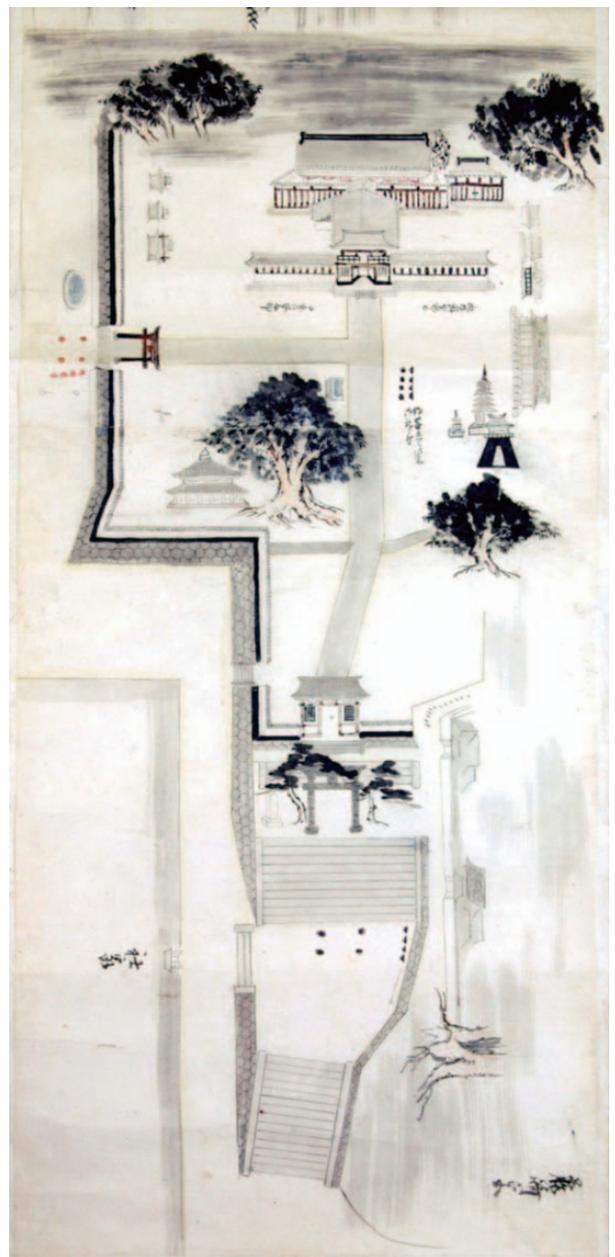


図11 藤崎宮(『肥藩図巻』より)熊本博物館所蔵
(方角は本殿がある図上が東側、図左が北側)

次に、慶応4年（1868）に記された「藤崎八幡宮社地図面」（図12）を見ると、建物の名称や寸法も細かく併記されており、より詳しい情報が得られる（野球場建設工事で調査した出土遺物にも、建物配置を踏まえて「神殿址」「経蔵址」などの注記がなされている）。

図面によれば、拝殿へ向かう石畳参道の左手（北側）には三間四面の「経蔵」があり、右手（南側）には二間五寸四方で二階建ての「鐘楼」が聳える。鐘楼の近くには、東西七間半の大きな「連歌屋」がある。拝殿手前の楼門左右にはそれぞれ五間四尺の廻廊があり、拝殿の奥行（東西）五間、本殿は幅（南北）九間、本殿の周囲には五尺四方程度の「荒人社」「天満宮」「地藏仏」「御崎大明神」などの末社が立ち並ぶ。

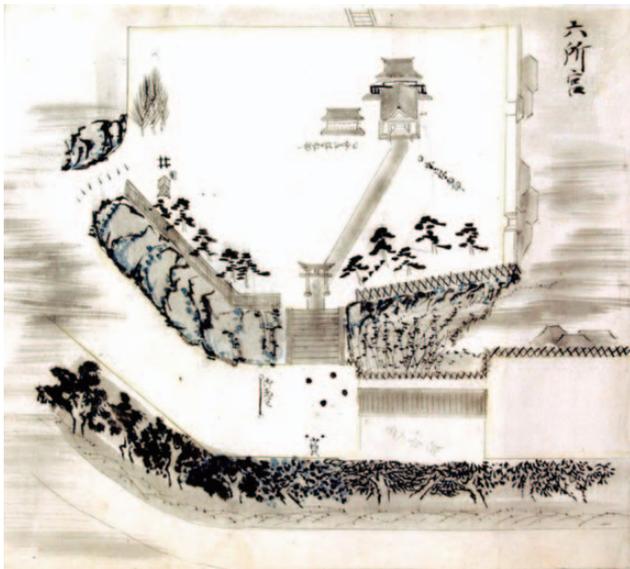


図13 六所宮（『肥藩図巻』より）熊本博物館所蔵
（方角は鳥居がある図下が南側、図上が北側）

ところで前述の『肥藩図巻』には、「六所宮」（図13）や「神護寺」（図14）などの警固記録も描かれている。これらは、江戸時代における藤崎八幡宮周辺の状況を知る参考資料となるので、本章で併せて触れておく。

まず「六所宮」とは、もと豊前国中津にあった六所大明神（春日・加茂・松尾・稲荷・祇園・貴船の六柱の神を合祀したもの）を、細川光尚の氏神として、正保元年（1644）に藤崎八幡宮の隣接地に勧請したものである。その場所は、藤崎八幡宮の南側に隣接して造営されていた（前述：図3・4）。『肥藩図巻』の「六所宮」（図13）を見ると、石段・鳥居・参道・拝殿・本殿などの配置をおおよそ窺い知ることができる。本殿の背後でさらに上へと続く石段は、北側に隣接する藤崎八幡宮へ向かう階段と思われる。

次に「神護寺」とは、現在廃寺になっているが、近世期には藤崎八幡宮の祭礼・行事に必ず参加勤仕した神宮寺である。文禄3年（1593）加藤清正が朝鮮出兵の無事を祈願させるために藤崎七堂のうち愛染明王堂を改めて建立し、開祖として秀舜法印を招請して寺務をさせたのが始まりという。従来、藤崎八幡宮には神宮寺として弥勒寺・勝成寺・妙楽寺の三寺が置かれて社僧が勤めていたが、近世に入ると神護寺が諸祭礼行事を執行するようになる。やがてその寺領は藤崎八幡宮領（200石）の半分（100石）となり、その他米や銀などの寺納では藤崎八幡宮以上の経済力を有するまでになったという。その場所は藤崎八幡宮の東側に隣接していた（前述：図3・4）。『肥藩図巻』の「神護寺」（図14）部分を見ると、楼門・本殿・お堂らしき建物などの配置を、おおよそ窺い知ることができる。

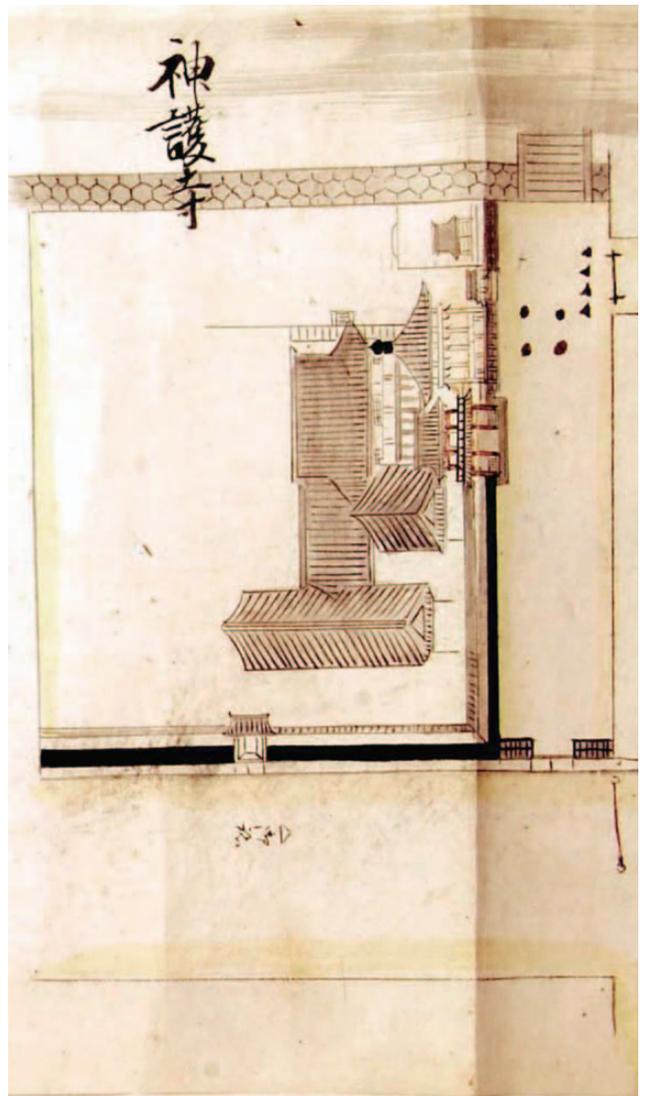


図14 神護寺（『肥藩図巻』より）熊本博物館所蔵
（方角は不明）

やがて幕末から明治へと時代が移り、熊本城は陸軍用地に編入され、本丸には鎮台本営が置かれた。そして明治10年（1877）、西南戦争の戦火によって藤崎八幡宮を含む熊本城一帯及び城下町まで広く焼失する。

当時の罹災記録は、当館所蔵の「熊本焼場方角図」(図15)で確認することができる。熊本鎮台を中心に見た場合、城下町の全焼(赤色範囲)は、北(図左)は京町本丁、南(図右)は古町などを含む白川右岸全域、東(図上)は井川淵から一部白川を越えて左岸の新屋敷まで、西(図下)は藤崎八幡宮や段山(図16)、さらに本妙寺手前の牧崎辺りまで広がっている。

なお藤崎八幡宮については、西南戦争によって灰燼に帰した様子が、古写真にも残されている(図17～19)。

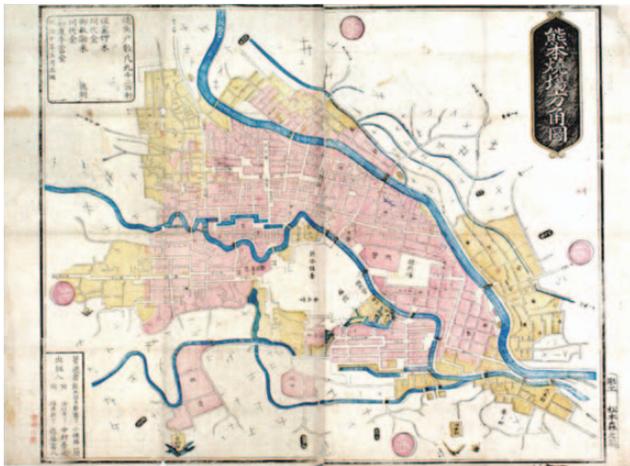


図15 「熊本焼場方角図」熊本博物館所蔵(赤色は全焼)



図16 同上「藤崎社」部分拡大 熊本博物館所蔵

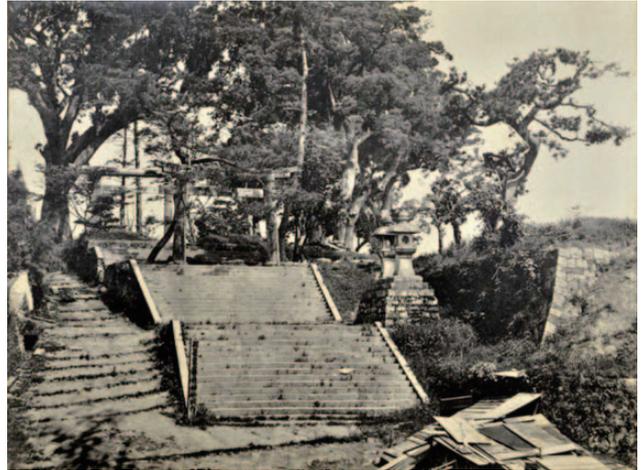


図17 藤崎八幡宮古写真 熊本城頭彰会所蔵(註8)
西から。石段の上に鳥居。手前右に戦後の廢材。



図18 藤崎八幡宮古写真 熊本城頭彰会所蔵(註9)
境内。鳥居のそばには灯籠が多数並んでいる。



図19 藤崎八幡宮古写真 熊本城頭彰会所蔵(註10)
境内。弾痕跡が残る白壁建物。楠や藤棚も写る。

5 現在地に遷座後の石造文化財等の状況

明治11年（1878）現在地に遷座した後の藤崎八幡宮には、西南戦争での焼失を免れた文化財も移築されて保存されている。境内の現況を写真で紹介する。



図20 藤崎八幡宮 拜殿（平成27年4月）



図21 移転した末社「御崎社」（平成27年4月）

境内には多くの石灯籠が見られるが、その多くは藤崎台から移転されたもので、報告書によれば慶長9年（1604）から慶応3年（1867）・明治のものもある。



図22 移転した石灯籠の数々（平成27年4月）

境内には「藤崎台出土経石埋納碑」もある。石碑の表に「藤崎台出土経石埋納碑」、ウラに「昭和三十五年三月 藤崎台縣営野球場建設に際し 旧藤崎宮経蔵址より出土した一石一字の経石一万二千三百九十六個及び甕片を移轉埋納した 台石は本殿址の礎石である

昭和三十六年三月五日 熊本縣教育委員會」と刻まれている（報告書には出土状況の写真掲載あり）。



図23 藤崎台出土経石埋納碑（昭和36年移転・埋納）

6 国指定天然記念物「藤崎台のクスノキ群」

前述した『肥藩図巻』にも描かれていた藤崎八幡宮境内の大楠は、西南戦争で神社が焼失・遷座した後にも現地で生き残り、やがて大正13年（1924）に「藤崎台のクスノキ群」として国の天然記念物に指定された。これらは藤崎八幡宮の境内に古くからあった神木で、これだけの巨樹が7本も群生している例は他にないというのが、指定を受けた最大の理由である（註11）。

樹勢はなお盛んで、最大のは樹高27m、いずれも樹齢およそ1000年と推定されている（図24：註12）。



図24 国指定天然記念物「藤崎台のクスノキ群」
（写真左側に見えるのは野球場バックスタンド）

西暦	和暦	藤崎八幡宮の歴史 及び 藤崎台・三の丸一帯の遺構の変遷	肥後国・熊本城・鎮台に関連する出来事
935	承平5	朱雀天皇が平将門追討を祈って石清水八幡宮を勧請し、藤崎八幡宮が鎮座する。以来、肥後国司造営の社となる。	
986頃	寛和2頃	肥後守となった清原元輔が「藤崎の軒の巖に生ふる松 いま幾千代か子の日過ぐさん」という歌を詠む（元輔集）。	
1024-1027	万寿年間	火災にあい、社殿を失った。時の国司は承平の草創にならって造営したという。	
1042	長久3	藤崎台より採取し、硯に改造したものと伝えられる「長久三年」銘の軒丸瓦（報告書『藤崎台』に拓本・写真あり）。	
1058-1063	康平年間	暴風のため、社殿を吹き破られた。この時も万寿の例にならって修造が行われた。	
1132-1134	長承年間	大風のため、社壇がこわれた。	
1135-1140	保延年間	修築が行われた。	
1230	寛喜2	暴風がおこり、神殿傾き、各所に損害をこうむった。この時も朝廷ではたびたび宣旨や御教書を出され、幕府からも修理を命じたが、当時の地頭・名主たちは先例を忘れ、なかなか修理されなかった。	
1237	嘉禎3	四条天皇は再び宣旨を下される。	
1238	嘉禎4	四条天皇は権中納言藤原為家を大宰府に派遣し、造営を催促された。	
1249-1255	建長年間	火災のため、大きな損失をこうむった。寛喜の先例にならってただちに修造が行われ、旧態に復したという。	
1288-1292	正応年間	風害をこうむったが、建長の先例にならってまもなく修造されている。	
1303-1305	嘉元年間	またもや大風にあい、社殿がこわされた。この時も先例にならって修理された。	
1309	延慶2	草創以来3度目の火災にあい、大損失をこうむった。この時の火災はよほどひどかったらしく、神体までも焼失してしまった。このことは、ただちに朝廷に報告された。	
1312-1323	正和年間 元亨年間	社殿营造の命が下されたものの、なかなか工事が着手されず、しばしば国宣下知状が下されたが、時たまたま南北朝の争乱にあい、せつかく出来上がった神体も仮殿に安置したまま43年を経ってしまった。	
1357	正平12	またもや暴風おこり、その仮殿までが大破してしまった。時の肥後守藤原武光が提出した文書「八幡藤崎宮寺可被造営注文」によれば、本殿・摂社・末社・神宮寺など20余の建物があつた、社人・社僧の居館を加えると壮大な規模を持った神社であつた（承平草創の頃より踏襲したものか。後の幕末の古絵図とも共通する建造物と規模を示す）。	
1368	応安元	4度目の火災にあい、神体までも焼失した。その復興も南北朝争乱の影響を受けてなかなかはかどらず。	
1378	天授4	藤崎台は託麻原の合戦にあたり、九州探題今川了俊の陣営となり、南朝方を奉ずる菊池武朝らの軍勢に備えられた。しかし戦闘は白川を隔てた託麻原において行われたため、特に被害はなかつたようである。	
1389	康応元	ようやく造営が完成した。	
1469-1488	文明年間 長享年間	時の肥後守菊池重朝が中心になり、全面的な修造が行われた。	
1469	文明元		出田秀信が千葉城を築く。
1476	文明8	菊池重朝が藤崎八幡宮において、千句の連歌会を催した。	
1521-1532	大永年間 享禄年間		鹿子木参河守親員が居城を移し、隈本城と称する（古城）。
1522	大永2	永い年月に損傷をこうむり、大がかりな造営が行われた。隈本の城主（古城）鹿子木参河守親員は、神官らと相はかり、建立をはじめ、上棟。以後10年の歳月を要し造営。（その時の建造物は江戸時代を通じてよく保たれた。）	

西暦	和暦	藤崎八幡宮の歴史 及び 藤崎台・三の丸一帯の遺構の変遷	肥後国・熊本城・鎮台に関連する出来事
1524	大永4	〃 遷宮を終える。拝殿が完成。	
1527	大永7	〃 経房の造営。	
1532	享禄5	〃 楼門が出来上がった。	
1542	天文11	後奈良天皇から「八幡藤崎宮」の勅額が下賜される。	
1550	天文19		城氏3代（親冬・親賢・久基）による統治。
1587	天正15		佐々成政による統治。
1591	天正19		加藤清正による統治。
1592	文禄元	清正、朝鮮出兵の際に藤崎八幡宮に戦勝を祈り、放生会、随兵、猿楽などを行う。	文禄の役
1599	慶長4	清正、朝鮮の役より凱陣した時には、新たに百石を寄進（社記）。	「慶長四年八月吉日」銘の軒平瓦。
1601	慶長6	従来の隈本城（古城）を発展させて、背後にひかえる茶白山を開き、新しく熊本城を構築することとなった。その時西の大手側にあたる藤崎台は、城郭の一部にくり入れられてしまった。以後、城内鎮護の神としても厚く崇敬される。	
1607	慶長12	茶白山に熊本城が築かれると、その西出丸の突端となり、北半は武家屋敷に、藤崎八幡宮は南半を占め、東南崖には石塁を、西南隅には柵型石垣が築かれた。	加藤清正による築城が完成、隈本城を熊本城と改める、町の名も熊本と改称する（新撰事蹟通考『肥後文献叢書』）。
1632	寛永9		加藤忠広の改易。細川忠利が肥後に入国。
1633	寛永10	忠利、みずから藤崎八幡に詣で、社領や祭式などを従来通りに取り決めている。（後年社殿の修復を行い、以降旧例に準じて13年ごとに営繕遷宮の儀を行わしめることにしたので、神事も境内もいよいよ整備されていった。）	
1643	寛永20		細川光尚、妙解寺建立。
1644	正保元	もと豊前国中津にあった六所大明神（春日・加茂・松尾・稲荷・祇園・貴船の六柱の神を合祀したもの）を、細川光尚の氏神として、藤崎八幡宮のそばに勧請した。	熊本町、農村ともに大雨洪水。熊本城石垣・土手・堀・櫓破損する（渡辺玄察日記）。破損箇所修復を幕府に申請。
1675	延宝3	藤崎八幡宮縁起絵図（藤崎八幡宮所蔵：狩野弘信筆か）。	
1689	元禄2	経蔵は（すでに正平の注文状にもみえているが）鳥居を入った中央参道の北側に建てられる（肥後国誌）。（昭和35年の発掘調査では、ほぼその地点と思われるあたりから「一字一石」の埋納経石が出土した。）	
1692	元禄5	経蔵跡では「元禄五年」のスタンプを押した文字瓦が出土し、経蔵再建の文献を立証した。	
1754	宝暦4		二の丸に細川重賢が藩校時習館を設立。
1770	明和7	坪井鍛冶屋町より出火、476軒焼失、内坪井、京町ほか。古京町一帯も火災に見舞われ、北西隅の森本櫓が焼失。	
1824	文政7	古京町長岡内膳屋敷に細川斉茲の別邸として二の丸御屋形が完成。本山旧屋形は解体し、内膳宅は牧崎に引越。	
1860	万延元	細川斉護死去、韶邦遺領相続。故斉護室の顕光院等が帰国するため、二の丸屋形を建込める。その西の梅屋敷に二の丸庭園が造られる。	
1862	文久2	宮内屋敷が藤崎八幡宮の東側に建てられる。	
1863	文久3	二の丸屋敷の西側に庭園が造られる。	
1868	慶応4	「藤崎八幡宮社地図面」（慶応四年五月）	
1868	明治元	神仏習合（神体混淆）の禁止令が出て、八幡宮の社僧として代々運命を共にして来た4ヶ寺（神護寺・弥勒寺・勝成寺・妙楽寺）は、経蔵や地蔵堂とともに廃絶してしまう。	
1871	明治4	時習館を解崩して兵学操練場とする。城内に錦山神社創建。洋学校開校。鎮西兵団病院開設。	廃藩置県。四鎮台のうち鎮西鎮台の本宮が熊本に置かれる。
1873	明治6	二の丸の操練場の兵営建設始まる。鎮西兵団病院（鎮西鎮台病院）を熊本鎮台病院に改称。	四鎮台が六鎮台に増加、鎮西鎮台は熊本鎮台と改称する。

西暦	和暦	藤崎八幡宮の歴史 及び 藤崎台・三の丸一帯の遺構の変遷	肥後国・熊本城・鎮台に関連する出来事
1874	明治7	陸軍省は政府に対し、病院建設用地として熊本城内二の丸に7565坪5合の土地の取得要請を行い、承認される。	熊本師範学校開校。熊本城、陸軍用地に編入される。本丸に鎮台本営が移転。錦山神社を城内より京町に移転。
1875	明治9	藤崎八幡宮の式年修復の年にあたる。造営工事を県令に出願し、翌年より着工すべく準備を整えていた。神風連の乱。熊本鎮台病院が他の鎮台病院に先行して現在地に竣工。	白川県を熊本県に改称。熊本地方裁判所設置。洋学校廃止、洋学校跡に臨時裁判所、県警本部を設置。
1877	明治10	藤崎八幡宮が西南戦争の戦火で焼失。その後、社地は熊本鎮台用地となる。参謀長樺山資紀中佐は藤崎台上において負傷。段山（藤崎宮西方下段の丘）の激戦で十三連隊長与倉知実中佐が戦死。熊本鎮台病院は、熊本陸軍病院と改称。	西南戦争が起こる。天守、本丸御殿その他焼失、城下も広く焼失。
1878	明治11	藤崎八幡宮が現在の井川淵町に移転し、仮殿を造営。	裁判所、京町に移転。
1884	明治17	藤崎八幡宮、現在の社殿が造営される。	宇土櫓及び監物櫓改修（陸軍）。
1888	明治21	熊本陸軍病院は、熊本衛戍病院と改称。	熊本鎮台が第六師団と改称する。
1894	明治27	歩兵第二三連隊が花畑日藩邸に兵営移転。	日清戦争勃発。
1902	明治35		陸軍特別大演習、本丸が大本営となる。旧南坂下馬橋通りを改修して行幸坂を新設、城内通路改修。下馬橋は下流に架け替えられ行幸橋と改称。
1904	明治37		日露戦争勃発。
1914	大正3		第1次世界大戦始まる。
1924	大正13	藤崎台のクスノキ群が国の天然記念物に指定。	
1924	大正14		熊本市の三大事業（市電・上水道・23連隊移転）完成記念共進会が開催される。
1927	昭和2		宇土櫓解体修理。
1928	昭和3	電車敷設（辛島町一段山線）のため段山の基部を掘り割る。	
1933	昭和8		宇土櫓、国宝に指定される。熊本城域が史跡に指定される。
1935	昭和10		新興熊本大博覧会を開催。
1936	昭和11	熊本衛戍病院は、熊本第一陸軍病院と改称。	熊本財金支局が花畑町に落成。
1941	昭和16		太平洋戦争勃発。
1944	昭和19	熊本第一陸軍病院に付された陸軍看護婦養成所（現付属看護学校）発足。	
1945	昭和20	戦後、熊本第一陸軍病院は厚生省に移管され、国立熊本病院として発足。	米軍進駐。旧幼年学校や工兵・騎兵・砲兵各隊兵舎に入る。宇土櫓一般公開。
1946	昭和21	化学及び血清療法研究所が古京町の輜重隊跡に設置される。	
1947	昭和22		熊本県立女子専門学校が開校（城内）。
1949	昭和24	藤崎台童園が旧陸軍病院の建物（現在の藤崎台県営野球場の場所）から現在地に新築・移設される。	大蔵省が熊本城を熊本市に貸下げ。
1950	昭和25		新文化財保護法により熊本城跡を史跡に、国宝建造物を重要文化財に指定。
1951	昭和26		熊本城の管理者に熊本市を指定。
1952	昭和27		本丸師団司令部跡に熊本博物館が開館。陸軍幼年学校跡に監物台樹木園が開園。
1953	昭和28	熊本県護国神社が、かつて招魂祭が行われていた藤崎台招魂場跡にて社殿の造営を開始。	長堀が倒壊。熊本大水害。
1955	昭和30		史跡熊本城跡が特別史跡に指定される。
1957	昭和32	熊本県護国神社が竣工・遷座。	宇土櫓の解体修理工事が完了。
1959	昭和34	野球場建設に先立って藤崎台の調査を実施。済生会病院が熊本市段山本町に移転・開設される。	天守閣再建起工式。熊本県営熊本城プール起工式。重文建造物の管理団体に熊本市を指定。県立第一高校が藪の内町から古城に移転。

西暦	和暦	藤崎八幡宮の歴史 及び 藤崎台・三の丸一帯の遺構の変遷	肥後国・熊本城・鎮台に関連する出来事
1960	昭和35	藤崎台県営野球場が完成。熊本で国体が開催される。 藤崎台の出土遺物（陶磁器・瓦など一括）が熊本県文化財専門委員会（当時）より熊本博物館へ寄託、現在に至る。	熊本城大小天守閣が再建・竣工する。 熊本城内に県営プールが完成。 二の丸に熊本地方合同庁舎が建設される。 県立第一高校（古城町）落成式。
1961	昭和36	熊本県文化財調査報告第二集『藤崎台』を刊行。発掘調査で出土した埋納経石は、現藤崎八幡宮境内、本殿の裏手に再び埋納し、標識には、かつて八幡宮の本殿に使用されていた、大礎石の1つを転用した。傍らには石碑を建立し、その由緒を明らかにしている。	天守閣再建記念に躍進熊本大博覧会が開催される。 二の丸に熊本地方合同庁舎が完成。
1962	昭和37		県立第二高校が二の丸に開校。 加藤神社、現在の位置に遷る。
1963	昭和38		NHK熊本放送会館が千葉城町の旧偕行社跡に完成。
1964	昭和39		特別史跡熊本城跡の管理団体に熊本市が指定される。
1965	昭和40	国立病院の本館新築落成。	
1968	昭和43		県立第二高校が二の丸から現在地に移転。
1972	昭和47		県立美術館建設予定地で発掘調査を実施。
1973	昭和48	熊本博物館建設予定地で発掘調査を実施。 熊本博物館建設準備室1973『熊本市二の丸跡調査報告書—熊本博物館建設予定地一』	
1974	昭和49	藤崎台隧道が完成する。	
1976	昭和51		熊本県立美術館が二の丸に開館。
1978	昭和53	熊本博物館が古京町に完成し、勸業館内から移転開館。	
1979	昭和54	熊本市教育委員会1979『熊本城三の丸森本櫓跡漆畑遺構調査報告書』	
1982	昭和57		熊本市教育委員会1982『特別史跡熊本城跡保存管理計画策定報告書』
1983	昭和58		特別史跡熊本城跡保存管理計画策定。
1993	平成5	県指定重要文化財「旧細川刑部邸」を東子飼町から現在地（三の丸）へ移築復元、公開開始。	
1994	平成6	三の丸（古京町）北側石垣修理工事完了。	
1995	平成7	熊本市子ども文化会館が開館。	
2002	平成14	熊本城跡遺跡群古城上段の発掘調査実施。	
2003	平成15		本丸御殿大広間復元整備工事着手（平成20年完了）。
2005	平成17	三の丸地区が「特別史跡熊本城跡」の範囲として追加指定。	
2007	平成19	国立病院、新病院の工事着工。	熊本城築城400年祭。
2008	平成20		熊本城本丸御殿が完成、一般公開される。
2009	平成21	国立病院、新病院竣工、移転。	
2011	平成23		九州新幹線が全線開業。 熊本城内の県営プール跡地に、桜の馬場城彩苑がオープン。
2012	平成24	熊本県教育委員会2012『熊本城遺跡群古城上段』	
2013	平成25	熊本博物館リニューアル工事に伴い、現状変更許可申請。熊本博物館敷地内（特別史跡熊本城跡内）において確認調査を実施。	熊本市熊本城調査研究センター開所。
2014	平成26		熊本市熊本城調査研究センター2014『熊本城跡発掘調査報告書1—飯田丸の調査—』
2015	平成27	熊本博物館、発掘調査を実施。リニューアル工事に着手。	

表1 藤崎八幡宮の歴史 及び 藤崎台・三の丸一帯の遺構の変遷／肥後国・熊本城・鎮台に関連する出来事
なお南北朝時代（1331—1391）の元号については、報告書『藤崎台』の記載に従った。

7 野球場建設と藤崎八幡宮跡発掘の経緯

前章までは明治10年（1877）藤崎八幡宮跡の焼失や移転に至る歴史を述べたが、その跡地（藤崎台）は、その後も近代を通して、軍の施設が置かれ続けた。

昭和12年（1937）7月には日中戦争が起こり、急増した戦傷病者を収容するため、藤崎台に熊本陸軍病院の分院が開院した（藤崎台分院）。

やがて第二次大戦の終結後、熊本城跡の大半は大蔵省の管理下に置かれ、一方で三の丸一帯は厚生省の管轄となり国立病院などの施設が置かれることとなる。

昭和34年（1959）の航空写真を見ると、藤崎台にはまだ野球場が建設されておらず、熊本医科大学付属病院分院（前述の藤崎台分院から戦後になって移管、昭和24年以降は熊本大学医学部附属病院の分院）の取り壊しもまだ始まっていないようである（図25）。



図25 昭和34年（1959）の藤崎台 熊本日日新聞社提供
画面左下には済生会病院と段山の残骸が見える。

やがて昭和35年（1960）秋季の第15回国民体育大会が熊本県内で開催されることが決定すると、県営野球場建設敷地に藤崎台が選定された。この工事によって東南隅の石垣は埋没し、900年以上にわたった藤崎八幡宮跡は大きく改変されることとなった。そのため施工に先立って調査を行い、その記録を刊行して将来に顕すことが議定された。調査担当者は、当時熊本県文化財専門委員だった坂本経堯、松本雅明、乙益重隆である。併せて、西南戦争の戦火を免れて移転した藤崎八幡宮の宝物・文書・石造物などの資料については、後藤是山、杉本尚雄委員らも調査及び編集に加わった。その調査成果は『熊本県文化財調査報告第二集 藤崎台』として熊本県教育委員会により刊行された（図26）。

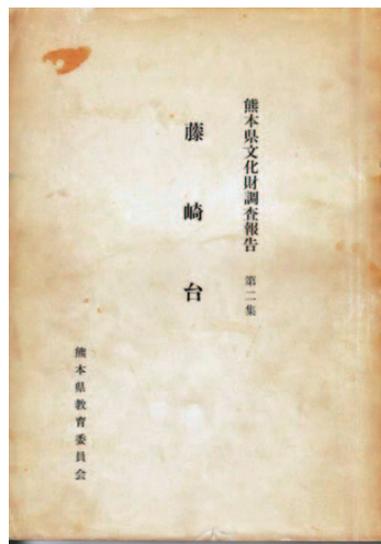


図26 熊本県教育委員会1961
熊本県文化財調査報告 第二集『藤崎台』

8 当時の調査状況（調査区の設定と遺構の関係など）

報告書によれば、遺跡の調査に際しては当初、熊本城絵図・藤崎台絵図と地形の実測図とを照合して調査トレンチを計画したようだ。しかし、現場にはコンクリートなどが縦横に横たわっていて、調査計画を実施するには多くの日数を必要とし、野球場工事をますます遅らせることになるため、結局ブルドーザー作業にしがたがって調査を進めている。それでも、「本殿址」「経蔵址」「側溝」や「遺物包含のピット」などをそれぞれ分離して調査している。

先に触れたように藤崎八幡宮跡は幾多の変遷を経ていることから、その遺構も年代の異なるものが重複している。当時の調査担当者はその分類把握に大変苦労したようだが、それでも「本殿址」では南北の井戸と祭器埋納のピットを、「経蔵址」では「元禄五年」銘瓦など文献資料と照応する遺構と遺物とを把握するなどの成果を挙げている。以下に、検出・報告された遺構について列挙する。内容の詳細は、報告書参照。

1) 本殿跡

- (1) 本殿跡の礎石
- (2) 南の井戸
- (3) 北の井戸
- (4) 本殿跡周辺のピット
 - ・南Ⅰ号
 - ・南Ⅱ号
 - ・北Ⅰ号
 - ・北Ⅱ号

- ・北Ⅲ号
- ・北Ⅳ号
- ・北Ⅴ号
- ・北Ⅵ号
- ・北Ⅶ号
- ・北Ⅷ号

2) 東北部のピット群

- ・ 1号
- ・ 2号
- ・ 3号
- ・ 4号

3) 経蔵跡

4) 側溝

5) 埋納経石（一字一石経）

6) 石垣

- (1) 東の石垣
- (2) 西の桷形石垣
- (3) 長い礎列
- (4) 藤崎台西側斜面の文化層

9 藤崎八幡宮跡の出土遺物の概要

当時の報告書では、前章で列挙した遺構別に、遺物の実測図・拓本・写真等が掲載されている。その内容・分類は以下のとおり。

1) 土器

- (1) 土師器皿

2) 瓦器

- 深鉢

3) 陶器

- (1) すり鉢
- (2) 高田焼
- (3) 小代焼

4) 国産磁器

- (1) 伊万里焼
- (2) 有田焼
- (3) 栗田焼

5) 輸入磁器

- (1) 青磁
- (2) 高麗青磁

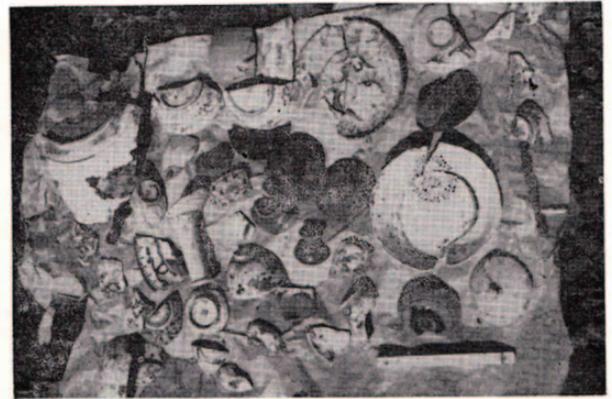
6) 瓦

- (1) 軒丸瓦
- (2) 軒平瓦
- (3) 文字瓦

(4) 刻印瓦

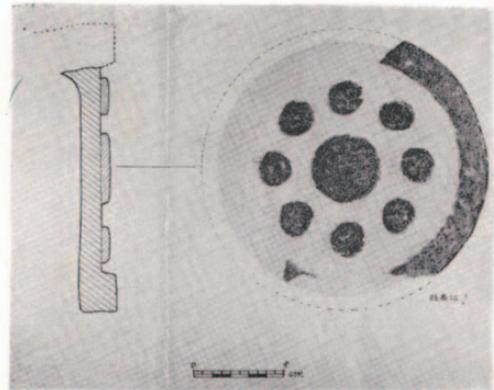
7) その他：金属製品など

しかし残念ながら、一部の遺物集合写真は掲載サイズが小さく、また白黒写真で印刷も不鮮明であるため、陶磁器の形状や文様については細かい観察が難しい。



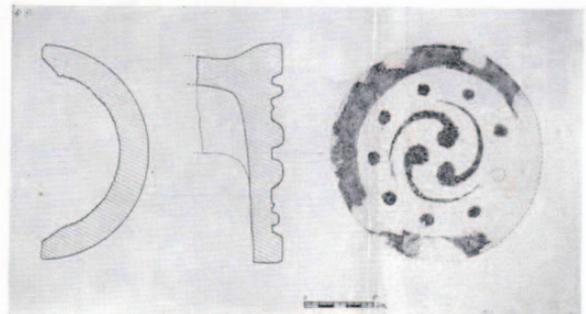
第4図 本殿址北の井戸出土 陶磁器・鉄釘など

図27 報告書掲載の遺物写真



第41図 経蔵址出土の九曜文軒丸瓦

図28 報告書掲載の遺物実測図・拓本



第42図 折型石礎出土の軒丸瓦

図29 報告書掲載の遺物実測図・拓本

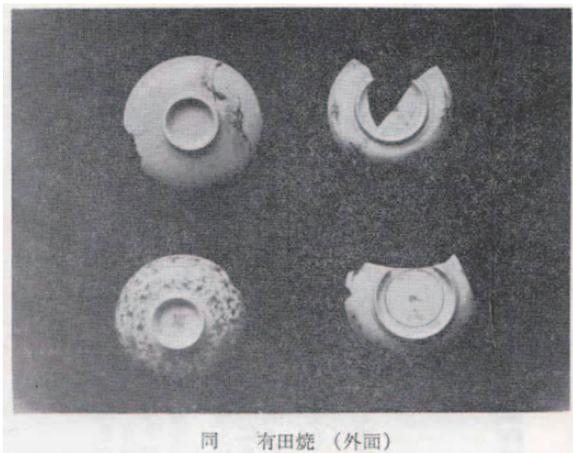


図30 報告書掲載の遺物写真

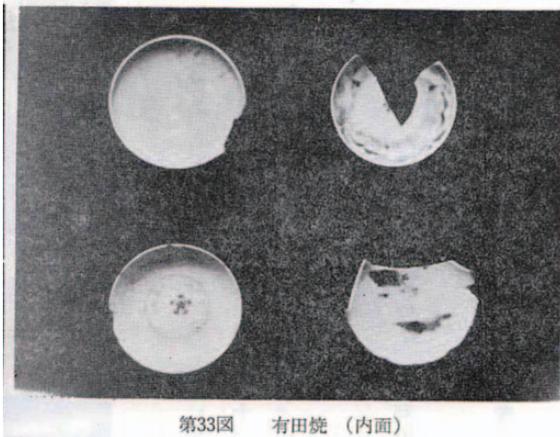


図31 報告書掲載の遺物写真

10 その後の資料の経緯と博物館での再整理・活用

調査後、これら出土遺物については熊本県文化財専門委員会より熊本博物館へ寄託された。コンテナで20箱以上の量があり、その大半は陶磁器や瓦類である。箱にはそれぞれラベルが入れられ、前述の遺構名(出土地点)や年月日が記されている。寄託後の約40年間は、特に活用の機会もないまま保管されていた。

だが平成11年度以降、国の緊急雇用対策事業や博物館ボランティアの方々の協力を得るなど、考古資料の整理作業を進める中で、「藤崎台」出土遺物についても水洗・D.B.登録など再整理を行うことができた。

一方、平成25年(2013)熊本市では「熊本城調査研究センター」が開所した。これまでに実施された熊本城跡での発掘調査をまとめた「総括報告書」作成のため、過去の発掘資料も含めて、現在実測作業などを進めている。「藤崎八幡宮跡」の出土遺物もその例外ではなく、調査対象に含まれている。こうした作業を経て、既報告の出土遺物についても、例えば陶磁器の年代や産地など、新たな知見が得られる場合もある。

こうした研究成果については、熊本城調査研究センターの協力を得て、当館の企画展『西南戦争古写真展—写真に残された熊本の記憶—』(平成27年4月14日～5月24日)において遺物を展示紹介するなど、一般公開するように努めている(図32～34)。

本稿において遺物の産地や年代を詳細に紹介できるのも、こうした研究成果による。但し正式な「総括報告書」の刊行は数年先の予定で、作業はまだ途中段階にあるため、網羅的な資料紹介は難しい。そのため、本稿でもごく一部の遺物紹介に限られることをあらかじめお断りしておきたい。



図32 企画展での「藤崎台」出土遺物展示風景



図33 企画展での出土遺物(軒丸瓦ほか)展示状況



図34 企画展での出土遺物(陶磁器ほか)展示状況

瓦は、巴紋や九曜紋の軒丸瓦などがある。いずれも藤崎八幡宮の境内建物に使用された瓦と思われる。

次に陶器は、皿・灰落し・碗蓋・片口鉢・土瓶などがある。産地は肥前や関西など。年代は16世紀末以降。



図35 巴文軒丸瓦（16世紀末～17世紀前半）
報告書「経蔵址」出土 ※本稿：図29に同じ

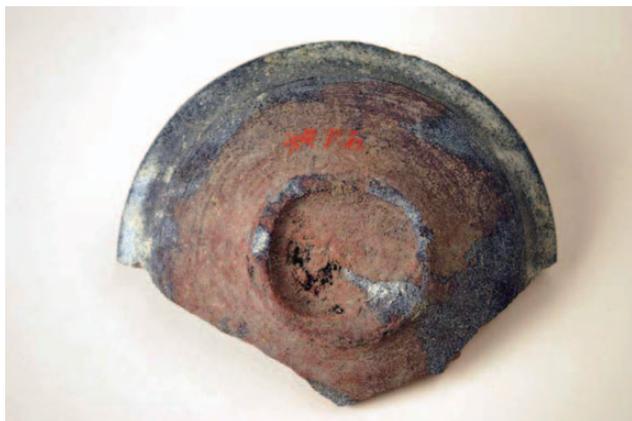


図38 陶器 皿 灰釉 肥前（1590～1610年代）



図36 巴文軒丸瓦（18世紀以降）



図39 陶器上絵 灰落し 関西（京・信楽系）18世紀
竹笹文



図37 九曜文軒丸瓦（江戸時代）
報告書「経蔵址」出土 ※本稿：図28に同じ



図40 陶器 碗蓋 関西系（18世紀後半～19世紀中頃）
鉄と呉須にて松文



図41 陶器 片口鉢 肥前（内野山窯）
（18世紀末～19世紀中頃）



図44 磁器 染付 碗・碗蓋 肥前（1710～1750年代）
法相華唐草文



図42 陶器 土瓶 薩摩焼（苗代川か？）
（18世紀末～19世紀中頃）灰釉

次に磁器には、染付や白磁などがある。器種は、小碗・碗・碗蓋・皿・紅皿など。年代は18世紀以降。



図45 磁器 染付 碗 肥前（1710～1750年代）草花文



図43 磁器 染付 小碗 肥前（1710～1750年代）
八つ橋文



図46 磁器 染付 碗 波佐見（1750～1810年代）雪輪草花文



図47 磁器 染付 皿 肥前系 (18世紀末~19世紀中頃)



図49 磁器 染付 碗 肥前系 (19世紀初~中頃)
格子文



図48 磁器 染付 小皿 肥前系 (18世紀末~19世紀
中頃) 口紅 (鉄釉)・東屋山水文



図50 磁器 染付 碗 肥前系 (19世紀初~中頃) 縞文



图51 磁器 染付 碗蓋 肥前 (18世紀中頃~後半)
薄文



图53 白磁 紅血 肥前 (18世紀後半~19世紀中頃)
(貝殻文)



图52 磁器 染付 碗蓋 肥前系 (19世紀初~中頃)
捻花文



图54 白磁 皿 肥前系 (19世紀) 法相華唐草文



11 まとめ

本稿は、半世紀以上前に報告書が刊行されている「藤崎台」遺跡の再紹介であった。既報告分と内容が重複してしまった箇所も多いが、新しい知見や近年の周辺状況も加味して紹介できた点は意味があったと思う。当館の今年度企画展『西南戦争古写真展—写真に残された熊本の記憶—』（平成27年4月14日～5月24日開催）においても、こうした「藤崎台」の歴史についてあらためて展示紹介し、出土遺物も陳列することができた。

また、「藤崎台」は藤崎八幡宮跡であると同時に、国指定天然記念物のクスノキ群もあり、それを利用する生物もみられる。総合博物館である当館としては、考古・歴史・植物・動物など多角的に関わることができるフィールドである。藤崎八幡宮跡（現：藤崎台県営野球場）は熊本博物館の南側に隣接した身近な場所であるので、リニューアル後は分野融合展示などを通して、来館者にもその価値を広く発信していきたい。



図55 熊本博物館常設展示リニューアルに伴う分野融合展示（イメージ図）

謝辞

最後になりましたが本稿の執筆にあたり、以下の方々にご協力いただきました。記して謝意を表します。

岩下忠佳 宮司・岩下通弘 権宮司（藤崎八幡宮）
福田晴男 正海郁雄 宮田晴行 毛利秀士
渡辺芳郎（鹿児島大学法文学部）
富田紘一（熊本市文化財専門相談員）
網田龍生（熊本市文化振興課）
美濃口雅朗（熊本城調査研究センター）
熊本日日新聞社 熊本県立図書館 藤崎台童園
熊本市歴史文書資料室 熊本城調査研究センター

順不同・敬称略

註・引用文献

- 1) 熊本県教育委員会1961『熊本県文化財調査報告第二集 藤崎台』
- 2) 熊本市熊本城調査研究センター2014『熊本城調査研究センター報告書第1集 熊本城跡発掘調査報告書1—飯田丸の調査—』より転載。
- 3) 新熊本市史編纂委員会1993『新熊本市史 別編 第1巻 絵画・地図（上）中世・近世』熊本市より転載。
- 4) 註3に同じ。
- 5) 地元在住の宮田晴行氏・正海郁雄氏らのご教示による。
- 6) 鈴木喬編著1980「藤崎八幡宮」『熊本の神社と寺院—熊本の風土とところ第二集—（21）』熊本日日新聞社
- 7) 註1より転載。
- 8) 熊本城顕彰会所蔵（熊本博物館寄託）「西南役戦跡写真帖」より。
- 9) 註8に同じ。
- 10) 註9に同じ。
- 11) 西岡鉄夫編著1980「藤崎台の楠群」『熊本の天然記念物—熊本の風土とところ第二集—（22）』熊本日日新聞社
- 12) 熊本県教育委員会（平成21年3月建）の「国指定天然記念物 藤崎台クスノキ群」説明板による。

参考文献

- ・新熊本市史編纂委員会1993『新熊本市史 別編 第1巻 絵画・地図（下）近代・現代』熊本市
- ・熊本博物館建設準備室1974年3月『熊本市古京町 二の丸跡調査報告書—熊本博物館建設予定地—』